

かぐらおか

第 87 号

平成 8 年 5 月 15 日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は初代学長 山田守英氏)



(写真撮影 動物実験施設 稲場 茂)

丘の道

医学科の新生を迎えて.....学 長	2	平成 8 年度大学院入学者名簿.....	13
人間の何かへの問い—真理の追求の場.....岡田 雅勝	3	クラブ今昔	
医学科新生記念写真.....	4	硬式庭球部とは?その概念、疫学、症状、検査所見、診断、治療法、予後について原稿用紙3枚半にまとめよ.....山本美知郎	14
平成 8 年度医学科入学者名簿.....	4	羽球部今昔物語.....池田 大輔	14
看護学科の新生を迎えて.....学 長	5	ギター部今昔.....谷山 宜之	15
看護学科の歴史を創るために.....野村 紀子	6	ロック研究会.....本間 俊一	15
看護学科新生記念写真.....	7	大学祭実行委員会から.....三関 哲矢	16
平成 8 年度看護学科入学者名簿.....	7	東医体成績.....	16
看護学科カリキュラム等.....	7	平成 8 年度入学式.....	17
保健管理センターから新生の皆さんへ.....菊池健次郎	9	平成 8 年度運営組織.....	17
新生を迎えて.....石川 貴光	10	平成 7 年度学士学位記授与式.....	17
新歓合宿を終えて.....鷺尾のどか	10	新生研修実施される(医学科).....	17
私の眼に映った日本.....シャハ シャマル クマル	11	平成 8 年度の主な行事.....	18
外国人留学生一覧.....	12	教官の異動.....	18
研究室紹介.....物理学	12	窓 外.....千石 一雄	18
平成 7 年度学位記受領者名簿.....	13		



医学科の新生を迎えて

学長 清水 哲也

皆さん、入学おめでとう。

希望に満ちあふれる、一人、一人の輝くばかりの表情を見るにつけ「入試」という難関を越えて、見事、栄冠をかちとられた皆さんへ、あらためて、心からの祝福を贈ります。

そしてまた、優秀な新生の皆さんを、今日まで、手塩にかけて、はぐくみ育ててこられたご父兄の皆様へ敬意と祝意を捧げたいと思います。

新生の皆さんが、本日、只今から、その第一歩を踏み出そうとしている医学の道は、決して単なる診療技術そのものを意味するものではありません。

診断技術や治療手技といった技術的なことを学ぶ前に「医の心」、あるいは「医の原点」に深く思いを馳せて下さい。今日、「社会」が求めている「期待される医師像」というものが、如何なるものかを、今日という日には是非とも真剣に考えてほしいのです。

そのためには幅広い教養を身につけ、豊かな人間性、自主的な判断力を常に養い、より高度な社会性を身につける必要があります。「初心忘るべからず」です。

そしてまた、ただ単に、専門分野のみにとどまらず、全般にわたる広い視野と高い見識を保持して下さい。

人間性あふれる豊かな感性と「病める人達」への限りない暖かさに満ち満ちた医学生であってほしいのです。

さらには生命倫理に対する深い畏敬の念を片時も忘れず、常に病める人たちの立場に立つこと、つまり、人の痛みをわが痛みととらえることのできる医療者であるためには、単に医学のみでなく、その周辺領域に係る知識と深い教養を是非とも学びとって頂きたい。

皆さんが本学で学習されるのは、単なる医学知識だけであってはなりません、人間性の成長こそが基盤となります。

柳田邦男氏の著書「犠牲—わが息子・脳死の十一日」から多くのことを学び取ることが出来ます。苦

悩の末に自殺をはかり脳死に陥った我が子を看取った手記に、現代医学は治癒の見込みのない患者を見放しがちだが、死が避けられない者こそ、かけがえない一日一日を大事にすべきであって、死にゆく者の時間を最大限に輝きのあるものにするための支援が必要であろうと述べております。

医師に厳しいみかたをする著者が、息子の主治医の「脳死であっても最後までお世話をします」という言葉に、あらためて医師に対する信頼感をもったと結んでおります。

医師こそは、患者とともに、ときには死の川を渡る船の船頭として、患者を彼岸に送り届ける役割を担うのです。死に行く患者に、死ぬことは怖くないと勇気づけ、安心させる義務があります。このことは医学の、そして医療のもつ側面をあますことなく語っています。

今や医学は、激動する社会現象から隔離された「病院」のなかのみ孤立して存在するものではなくなりつつあります。

したがって6年間という限られた期間に幅広い教養と医学の専門的学習を両立させるためには、必ずしも一般教育、専門課程という形式的な区分にとられることなく、全体を一貫とした観点から考える必要があります。

本学では、その教育効果を期待して、開学当初より6年一貫教育という思想に立脚したカリキュラムを実施しております。

したがって、一般教育という呼び方も基礎教育という名称に変えました。本学で実施されている、統合医学型の利点は、学習の効率化に連なります。

おわりに「部活」などの課外活動にも積極的に参加して強靱な肉体と強い意志力の涵養にも努めて下さい。希望に満ちあふれた諸君の前途に、再度、祝福を送って、式辞と致します。



人間の何かへの問い—真理の追求の場

医学科第1学年担当 岡田 雅 勝

新入生の皆さん、入学おめでとう。皆さんの入学を心から歓迎いたします。旭川は自然の恵みを受け、大雪山系や十勝山系を背景にして、石狩川を始めとして忠別川や美瑛川などが流れています。旭川医科大学は、まさにこの自然の恵みを受け、旭川市の静かな郊外地にあり、勉学の環境のいい場所にたっています。

皆さんは第24期生として入学されました。多くの優れた先輩たちをもち、ようやく旭川医科大学としてのカラーもできつつあります。よき校風を受け継ぎ、新しい校風をつくっていただきたいと思います。私たちはいつも時の流れのなかで、生きています。それだけ私たちはいつも変化の相におかれ、生きていかなければなりません。ですから、皆さんはこの大学で学ぶのにあたり、積極的に自らの主体性をもって新しい校風をつくりあげるように努力していただきたいと思います。

これからの大学は変わっていくことと思います。若い力で新しい大学づくりに皆さんが参加してください。しかしながら大学は大学である限り変わらないことが一つあります。それは大学は真理の追求する場であることです。大学が真理の追求を止めることはありません。そのことを心していただきたいのです。そうすると自ずと皆さんが大学でしなければならないことが理解できるに違いありません。

皆さんは医学部に入られました。ですから、大学を出ますと、医師あるいは医学研究者になるわけです。そうした専門家になるために、大学で学ぶのですが、医師になることは実に大変なことです。医学の技術の修得は無論のことですが、何よりも人間理解が必要になります。人間という生き物は実に複雑です。いろいろな思いに生き、いろいろなものをつくり、さまざまな価値観を抱き、さまざまな仕方ですべての生き物です。その生き物が病いになり、それからの癒しを求め、病院にやってきます。それ

に関わるのが、医師なのです。

医師は全て患者を癒すことはできません。患者の病気も多様ですし、癒すことができない病気もたくさんあります。そもそもどんな患者も結局は決まって死にいたりします。このようなことを考えると人間とは何かという問題こそ最も重要な問題なのです。可能な限り、皆さんは人間の何かの問いを問い続けるように努力してください。

先ほど大学は真理の追求の場であると言いました。最も必要な真理は人間の何かを問うことだと思います。これに答えることは容易にはできません。しかしこの問いを問うことに若者の特権があらうと思います。若い情熱を人間理解へ注いでください。人間理解は、科学、芸術、スポーツ活動、旅行、社会奉仕など色々な機会にできます。そうしたものへの飽くことなき探求は、無論必要なことで、若さがいろいろなものへの探求を可能にさせています。

また青春時代を有意義なものにするように努力をしてください。人間は自分一人で生きていくことのできない存在であることに心してください。多くの人々と交わり、多くの仲間の人たちをもつように努めてください。そして真の友人をつくってください。友情は人生を豊かにいたします。人々との真の交わりにいろいろな可能性が芽生えます。

若者であることから本当にいろいろな可能性が開かれます。でも、その可能性を開き、未来に羽ばたくのも、一人一人の姿勢の問題になります。皆さん一人一人が自分の人生に挑戦し、豊かな学園生活を送られるように切望いたします。



看護学科の新入生を迎えて

学長 清水 哲也

皆さん、入学おめでとう。

希望に満ちあふれる、一人、一人の輝くばかりの表情を見るにつけ「入試」という難関を切り抜けて、見事、栄冠をかちとられた皆さんへ、あらためて、心からの祝福を贈ります。

そしてまた、優秀な新入生の皆さんを、今日まで手塩にかけて、はぐくみ育ててこられたご父兄の皆様へ敬意と祝意を捧げたいと思います。

皆さんは、本学医学部看護学科の第1期生であります。

1期生の動向は、その後の看護学科の運命を決めるといっても過言ではありません。

たとえば、医学部医学科の1期生について申しますと、この1期生の諸君が入学した時は、校舎など全くなく、ただ広漠とした原野がそこにあるといった状況で、もちろん事務部門の建物もなく、教育大学旭川校の老朽化のため既に閉校になってしまっていた附属小学校の旧校舎を支柱で補強した状態で、11月5日の入学式の翌日から授業を開始致しましたが、校舎の窓からは粉雪が吹き込んできて、暖房設備もストーブのため、学生諸君にはオーバーコート、手袋の着用を許可した程度でした。廊下や体育館には常時、数センチの雪が積もっていました。

まさに、学生諸君も教官も歯を食いしばっての辛い辛い毎日でした。この授業風景は、数カ月続き、翌年の5月13日から新校舎に移転するまで、この苦難の日々が続いたのでした。

これだけの十字架を背負って出発した1期生の6年後の医師国家試験の成績は、実に全国第3位という素晴らしいものでした。

1期生によって作られたこの実績は、次々と引き継がれ、昨年春の17期生の国家試験合格率は全国81大学中、第2位という好成績でありました。

皆さんも、現在は、医学部医学科の既にある建物を取り敢えず利用しての条件の整わないもとでの授

業が当分続きますが、明年度からは看護学科の7階建のビルの工事が始まり、平成10年度中には新しいビルに移転ができます。

艱難汝を玉にす、という「言葉」があります。大学における新しい学科の創設には、この種の非常事態がつきまといますが、当分の間は我慢をして、是非とも、医学部医学科1期生のようなよき伝統を作って頂きたいと思います。

今、我が国には人口動態の急激な変化による、各種の社会事象が惹起されています。

このためには、新たな医学・医療に対する社会的ニーズが生じて参ります。したがって、高いレベルの看護職者として広い教養基盤に支えられた豊かな人間性と問題解決能力と国際性を備えた資質の高い人材の養成こそが急務となっております。

看護学科の教育理念は、あらためて申すまでもなく、「生命の尊厳」を第一義とし、人間性を涵養し、看護学の理論と実践をきわめ、看護領域における諸問題を統合した「かたち」でとられ、そのうえで自ら問題を解決する能力、problem solutionといわれる自主的問題解決能力を身につけることによって、他の看護職者を指導する能力と識見を持った看護職指導者を養成することにあります。

またカリキュラムについても、国際性を身につけて頂くために語学や、さらにはまた現今の「情報社会」に対応できる数理統計情報処理の講義や実習、あるいはまた、最北の地にある国立医科大学として寒さと「からだ」の問題を考える「寒冷地域看護論」などを特徴ある主課題として位置付けを致しております。

希望に満ちあふれた皆さんの前途に、再度、祝福を贈って、式辞と致します。



看護学科の歴史を創るために

看護学科第1学年担当 野村紀子

御入学おめでとうございます。

今新しい気持ちで、スタートラインに立っていることと思います。ご存じの通り、皆さんは当学科の第1期生です。このことは、第1期生である皆さんが看護学科のこれからの歴史を作り上げていくことでもあります。平成のこの時代に、看護教育が大学で行われることは、全国レベルで考えると特別珍しい事ではなくなっています。この学科も42番目にできたこととなります。その証拠に北海道でも3番目の看護学科となっています。しかし、先輩格のいろいろな看護学科も設立の時期にそれほどの違いはありません。その意味でも、皆さんが作り上げる看護学科としての歴史には、具体的なモデルが少ないと言わざるを得ません。しかし、とても幸いなことに、本大学の医学部の諸先生・事務局の皆さんや学生さん達は大変好意的で、この看護学科の設立に対し多大なご協力をいただきました。たとえば、今まで使っていた講義室を看護学科専用に空けていただきましたし、実習室も併用できるよう準備し、学生玄関ホールを縮小して、更衣室も作っていただきました。図書館のスペースにしても同じです。医学科の学生さん達は、看護学科の新生を受け入れる準備さえしてくれています。清水哲也学長を始めとして、旭川医科大学・病院、そして看護部などすべての人たちが、看護学科の皆さんを喜んで迎えてくれていることを生涯忘れないでほしいと思います。

大学での看護教育は、道内ではあまり知られていないようで、この学科を終えると看護管理者・看護教育者あるいは看護のリーダーシップをすぐとれる人になると理解されがちですが、それは正しい理解ではありません。もちろん臨床で看護婦(士)などとして仕事につくことも可能であり、それを希望する人もいるでしょう。しかし、管理者・教育者あるいは看護のリーダーシップがすぐとれるようになることは同義語ではないのです。ただ、看護学科を卒業することで、看護の修士課程や博士課程での学びが可能となるのが、看護学科での学びの特徴です。

1970年にミネソタ大学病院で試行され、確立・発

表された看護方式にプライマリ・ナーシングという方法があります。この時、看護を実践する看護婦をプライマリ・ナースと表現します。このプライマリ・ナースを別に、「3つのAを持つ看護婦」と表現することもあります。この「3つのA」とは、Accountability, Authority, Autonomyを指します。すなわち、十分な教育を受けた看護婦(士)が、自己の判断に基づき全責任を持って看護を計画し、患者と全入院期間を通して直接に1対1の関係を確立して看護を進める。この方法で看護を実践するには、「3つのA」が必要とされるということです。もっと具体的に言えば、看護の実践には、責務・権限を持ち、かつ看護婦(士)自身が自律していなければならないということになります。自律とは、自分を律すること、あるいは自分の足で立つことでもあります。

これらの言葉は、何も看護婦(士)の仕事に限ったことではありませんので、大学生となった今から心してほしいと思います。また、新しい学科でありモデルが少ないと申しましたが、だからこそ、第1期生である皆さんの姿勢・態度・言動でこれからの看護学科のあり方が創られていくこととなります。新しいという点では、看護学科の教官もまた新しい気持ちでスタートラインに立っています。教官の気風としては、自主的に何事も前向きに望み、それぞれの個性を尊重し、自由でありたいと考えております。自由であることは、また自己の責任が問われ、自律していなければなりません。

看護学科での4年間の学びは、一般の大学生の間で言われるような決して甘いものではありません。看護の学びは、講義や演習・実習以前に、自己を知ることであり、自己の啓発に努めることです。この4年間の大学生活を充実させるために、何をどうするかこの機会にぜひ考えてほしいと思います。では、元気に一緒に歩き始めましょう。



旭川医科大学医学部看護学科の授業科目の履修方法、試験及び進級等取扱規程について

皆さんが入学し、卒業するまでの間の授業科目の履修、単位の修得、進級そして卒業に至る取扱いはこの規程に定められています。

従って、この規程は皆さんにとって重要なものですが、条文の形式で作成されているためわかりにくい面もあると思いますので、各条文について説明したいと思います。

旭川医科大学医学部看護学科の授業科目の履修方法、試験及び進級等取扱規程

(趣旨)

第1条 この規程は、旭川医科大学学則(昭和48年旭医大達第1号。以下「学則」という。)に定めるもののほか、旭川医科大学医学部看護学科の授業科目の履修方法、試験及び進級等の取扱いについて必要な事項を定めるものとする。

「学則」には、修学に関する基本的事項が定められていますが、授業科目の履修等についての詳細は、この規程で定められています。

(授業科目等)

第2条 授業科目、単位数並びに当該授業科目を開設する学年及

び学期(以下「開設期」という。)等は、学則別表2のとおりとする。ただし、教育上必要があるときは、教授会の議を経て変更することがある。

2 授業科目は、学則別表2に定める開設期の順に従って履修しなければならない。

「学則別表2」は、学生生活のしおり(以下、「しおり」といいます。)の9ページにあります。この表の中に記載されている「区分」、「分野」等については、しおり7ページを参照してください。

(履修届)

第3条 学生は、学則別表2に掲げる授業科目のうち、必修以外の授業科目の履修については、履修しようとする授業科目を選択し、履修届(別紙様式第1号)を所定の期日までに学長に提出しなければならない。

2 前項の規定により届け出た授業科目は、当該学期の授業開始の日から所定の期日内に届け出た場合に限り、これを変更し、又は取り消すことができる。

各学年ごとに割り振られている選択科目のうち、履修しようとする授業科目を履修届に記入して提出して下さい。(履修届の配布と提出先の担当は学生課教務係です。)変更する場合は、期間内に申し出下さい。

提出期間又は変更期間については、その都度掲示しますので必ず確認して下さい。

(履修の許可)

第4条 学長は前条第1項の履修届の提出があった場合は、必修科目の履修状況等を勘案し、履修を許可する。ただし、選択科目(助産婦)の履修届の提出があった場合は、第3学年前期までの学修の評価及び面接等を総合的に勘案し、履修を許可する。

履修届により届けられた選択科目は、各人の履修状況、申込人員などを考慮して許可しますので、授業担当教官に確認してください。

(試験)

第5条 学則第11条の規定に定める試験は、定期試験、追試験及び再試験とする。

2 前項に定める試験のほか、担当教官は中間試験を随時行うことができる。

3 定期試験は、学年末に行う。ただし、学年の途中で終了した授業科目については、学年末以外の時期に行うことができる。

4 追試験は、定期試験の受験資格を有する者が、疾病その他の事由により当該試験を受験できないときに、あらかじめ定期試験欠席届(別紙様式第2号)を学長に提出し、正当な理由として認められた者に対して行う。ただし、やむを得ない事由によりあらかじめ届け出ることができなかったときは、その事由を付して直ちに届け出なければならない。

5 再試験は、定期試験又は追試験を受験し、不合格となった者に対して行うことがある。

試験期間については、しおり14ページの学年暦に記載していますが、その都度掲示しますので必ず確認してください。

追試験は、疾病その他の事情で定期試験を受験できないときに、正当な理由として認められた場合行います。

再試験は、定期試験又は追試験の不合格者に対して行うことがあります。

どちらの場合も実施については、その都度掲示しますので必ず確認してください。

試験を欠席する場合は、定期試験欠席届を必ず提出しなければなりません。

(試験の受験資格)

第6条 定期試験は、各授業科目の講義、実験、実習及び実技のそれぞれの時間数の3分の2以上出席しなければ受験することができない。

2 2人以上の教官が担当する授業科目については、各担当教官ごとに前項の基準によることができる。

3 特別の理由により所定の出席時間数に達しない者で、当該授業科目の担当教官がその理由を認め、かつ、教務委員会の議を得た場合は、この限りでない。

各授業科目の講義、実験、実習及び実技のそれぞれの時間数の3分の2以上出席しなければ定期試験を受けることができないのが原則となっております。

やむを得ず欠席するときは、必ず欠席届を提出してください。

(学修の評価)

第7条 試験その他の審査による学修の評価は、優、良、可及び不可の4種とし、優、良及び可を合格とし、不可を不合格とする。ただし、2学年以上にまたがる授業科目で履修途中における学修の評価は、合又は否とする。

試験の評価は優、良、可が合格で不可は不合格となります。

2学年以上にまたがる授業科目(専門科目のみ)の履修途中における学修の評価は、合又は否と判定します。

進級留置された者の2学年以上にまたがる授業科目の取り扱いについては、第11条で説明します。

(成績等の通知)

第8条 成績等は、各学年末に学生へ通知するものとする。

各人の成績の通知の日時は掲示によりお知らせします。

(単位の修得等の認定)

第9条 授業科目の単位修得又は履修の認定は、第5条第1項に定める試験その他の審査に基づき担当教官が行うものとする。ただし、2人以上の教官が担当する授業科目のうち、各担当教官ごとに単位修得又は履修の認定ができない授業科目については、各担当教官の合議によるものとする。

2 前項の規定に定めるもののほか、第5条第2項の規定による中間試験等の成績を参考として授業科目の単位修得の認定を行うことができる。

この条文は、授業担当教官が単位の認定に当たる際の取り扱いです。

(留置)

第10条 次の各号の一に該当する者は、進級(卒業を含む。以下同じ。)させず、原級に留置くものとする。

(1) 第3学年への進級留置

第2学年末までに所定の授業科目を履修し、必修の基礎教育科目14単位及び選択必修の基礎教育科目11単位以上修得できなかった者

(2) 第4学年への進級留置

第3学年末までに所定の授業科目を履修し、必修の専門基礎科目30単位を修得できなかった者

第3学年へ進級するためには、第2学年末までに必修の基礎教育科目14単位及び選択必修の基礎教育科目11単位以上計25単位以上修得する必要があります。

修得しない場合は、第2学年に留年することになります。

これについては、しおり11ページの卒業要件単位数表の中の基礎教育科目の欄を参照してください。

第4学年へ進級するためには、第3学年末までに必修の専門基礎科目30単位を修得する必要があります。

これについては、しおり11ページの卒業要件単位数表の中の専門基礎科目の欄を参照してください。

(授業科目の再履修等)

第11条 前条の規定により原級に留置された者の単位修得を認定された授業科目は再履修を認めない。

既に単位を修得した授業科目を再履修することはできません。可と認定された授業科目を再履修して優の認定を受けることはできないということです。

2 原級に留置された者の合又は否で判定された授業科目は、原級に留置された学年において、改めて履修しなければならない。

2学年以上にまたがる授業科目(専門科目のみ)の合又は否で判定された授業科目は、原級に留置された学年において、改めて履修しなければなりません。

3 前条第1号の規定により原級に留置された者は、第1学年及び第2学年に開設されている所定の授業科目を履修又は再履修し、単位修得又は履修の認定を受けなければならない。

第2学年末までに必修の基礎教育科目14単位及び選択必修の基礎教育科目11単位以上計25単位以上修得できず留年した者は、第1学年及び第2学年の授業科目を履修又は再履修し、合格しなければなりません。

4 第3学年に進級した者で、第1学年及び第2学年において必修の専門教育科目の単位修得の認定又は合の判定をされなかった授業科目については、第3学年に履修することとされている授業科目にかかわらず、当該授業科目を優先して履修しなければならない。

第3学年の者で、第1学年と第2学年の必修の専門教育科目の単位を未修得の者は、未修得の授業科目を、第3学年目の授業科目より優先して履修しなければなりません。

5 第3学年において履修することとされている必修の専門科目33単位を修得又は合と判定された者でなければ、第4学年に開設する実習に関する授業科目を履修することができない。

第4学年で行う実習科目は、第3学年で履修することとされている必修の専門科目の全てを修得又は合と判定された者でなければ履修できません。

6 学則第26条の規定により卒業を認定された者以外の者は、卒業に必要な授業科目を履修又は再履修し、試験その他審査に合格しなければならない。

必要単位が修得できず卒業できなかったものは、卒業に必要な授業科目を履修又は再履修し、合格しなければなりません。

以上、説明しましたが、不明な点がございましたら、学生課教務係へ問い合わせてください。



保健管理センターから新入生の皆さんへ

保健管理センター所長 菊池 健次郎
(内科学第一講座教授)

医学科、看護学科の新入生の皆さん、旭川医科大学への入学おめでとうございます。皆さんは今後、21世紀の医療を担う医師あるいは看護婦(士)・保健婦・助産婦などの医育・医療スタッフを目指し、勉学に、クラブ活動に、また、ボランティア活動に励むこととなります。そして実り豊かな campus life を過ごすためには、心身の健康保持、増進が不可欠となります。

本学の保健管理センターは、皆さんの心と身体両面にわたる健康管理を目的とし、昭和59年に開設され、平成8年で13年目を迎えました。保健管理センターは、これまで5人の歴代所長の諸先生の御尽力と、開設以来の常勤スタッフであるカウンセラーの酒木保講師、保健婦の玉川憲子さんに加え、内科、精神科神経科、整形外科、眼科、耳鼻咽喉科、歯科口腔外科の各科の健康相談医(非常勤医師)の皆さん、事務局の学生課の皆さんの熱意、チームワークにより年々発展、充実してまいりました。さらに、平成8年度からは医学科での女子学生の増加、看護学科の新設を考慮し、婦人科、外科の先生方にも健康相談医として参画して頂くことになりました。このように皆さんの多様化した健康管理についての相談に応じる体制をつくりつつあります。

近年、医学の研究領域においては、最新の医用工学的、分子生物学的、遺伝子工学的手法などを用いた先端的研究の遂行や高度先進医療など質の高い医療の導入が普遍化されつつあります。また、医学、看護学の教育面では、専門化、高度化のみではなく、統合的普遍的知識や技術の修得などを考慮した教育改革が提起されています。加えて医療面では、本格的な高齢化社会の到来をも視野に入れ、患者や家族の家庭的、経済的、社会的、心理的背景にも十分心配りができ、在宅医療、訪問看護などへの積極的対応ができる、すなわち全人的医療・看護を提供できる医師・医療スタッフの育成が今日最も強く要請されています。一方、21世紀には大学受験年齢人口の減少が指摘されており、つまり、21世紀の医療、医学・看護学教育を担うべき皆さんへの社会的要請

はこれまでになく大きく、かつ厳しいものがあります。

このような社会環境、医療・教育環境の変化にもとづく要請に十分答えられる医師・医療スタッフになるためには日頃の心身にわたる健康の自己管理は必須かつ大きな責務と考えられます。その意味では、皆さんに保健管理センターのシステムやルールを十分理解して頂き、大いに利用して頂くことを切望しております。保健管理センターのシステムやそのサービス内容の詳細は、学生課より皆さんにお配りする「保健管理センターのしおり」に記載してありますので、是非目を通して欲しいと思います。その中で特に強調したい点は、医師や看護職を目指す皆さんの健康の自己管理意識の向上とその指導、カウンセリングをあげ、それに沿った定期検診受診率の改善、カウンセリングを含めた検診内容の拡充を計画、実施中です。その1例として、主に新入生の皆さんを対象にした「AIDS と共に生きる時代の中にあって」の講演会の開催、「ケガの予防と応急手当について」、「心のうるおいを保つために」の講習、検診内容の充実として新入生に対する心電図検査、血液検査(末梢血算、生化学)の導入、などを実施しております。本保健管理センターの常勤スタッフはもとより健康相談医の皆さん、学生課の皆さんはいずれも優しく、親切な方々で、本保健管理センターの雰囲気は家庭的です。皆さんが実り豊かな Campus life を過ごし、かつ学問的、社会的要請に大分対応できる心身共に健全な医師・医学者、看護職者になるべく、本保健管理センターもその一翼を担えるよう努力したいと考えております。皆さんも健康の自己管理に心がけ、毎年の定期検診を必ず受け、また、大いに保健管理センターを活用して頂ければ幸いです。

新入生を迎えて

第6学年 石川 貴充

学生課や図書館になら足を運んだ人も多いと思いますが、その先の、“シベリア廊下”のずっと向こうに私達4、5、6年生は居ます。新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

私が1年生の頃は、上も下も白い服を着た先生や6年生なんかを見るとビビって道を譲ったりしていたものでした。新入生の皆さんには僕等はどんな風に見えるのでしょうか。実際に6年生になった今は1日の殆どを病院の中で過ごしていますし、老体に教育棟までの道のりは遠く、滅多に下級生とは顔を合わすことはありません。久し振りに学食なんかに行ってみると、見たことのない若者達でいっぱい隣の学校の学生も混じっていたりして、誰が誰だかさっぱり分からず、やっぱりビビっています。

全国各地から初対面の人達が集う訳ですから、今の時期、新入生の皆さんの方が戸惑いは大きいはず

です。クラブ選択にしても、友達が多くできるかどうかで選んだ人も多いと思います。確かに同じクラブの友人とはこれから深いつき合いをしてゆく訳ですが、それ以外にも最初口もきかなかった人が学年が進むと親友になっていたりするというパターンが意外とあります。色々な人と話をして気の合う仲間を見つけて下さい。考え方の角度の違う人達と話をすれば、同時に自分の内面のバランス感覚を磨くことにもなります。病院で実習をしていると感じるのは、患者さんは私達に特別立派な人格を期待しているのではなく、普通に話しかけることを願っているということです。ところが「普通」というのが意外と難しい。偏りなく、わけ隔てなく人と付き合うことが医療の世界では重要だと感じる事がよくあります。今年の新入生の皆さんは、学科が2つになったことで出会いのチャンスが増えた訳です。色々な人の考え方を吸収して、実り多い学生生活を送って下さい。

新歓合宿を終えて

新入生歓迎実行委員会委員長 第2学年 鷲尾のどか

先日、毎年恒例の新歓合宿を無事終えました。新歓委員の顔合わせは12月からありましたが、本格的な活動は3月に入ってからだったと思います。合格者に郵送するパンフレット、下宿・アパート等の案内の印刷・製本、ホテルでの受験案内、受験生へのお茶配り、入学後の病院実習の打合わせなど全ての新歓委員が分担してこれらの仕事に取り組んでいました。そして合宿の当日は28人の新歓委員がおそろいのトレーナーを着て働いていました。合宿ではクラブ紹介、学内めぐり、クラブの出店が行われた後、観音ロイターに移動してチューターとの語らい、自己紹介を含めたゲーム、クラブ乱入、新入生同士の語らいなどが行われました。私は去年は新入生として、今年是新歓委員として合宿を楽しむことができました。新入生の人達にも良い思い出ができたので

あれば新歓委員として心底嬉しいです。

今年は医学科の入学後約1ヶ月後に看護学科の入学があります。新歓委員は医学科の新歓行事同様、看護学科の新歓行事にもベストを尽くし、成功させたいと思っています。医学科の新歓行事に当たり、去年の新歓委員の先輩のアドバイスは大変有難いものですが、今年度が第1期である看護学科の新歓行事について新歓委員でもわからないところが多々あります。医学科の合宿を終えて一段落つきましたが、これからも頑張りたいです。

今の段階で新歓行事の仕事を振り返ってみると、実に沢山の方が身体的にも精神的にも助けてくれたように思います。委員長である自分よりも他の委員はしっかりしていて自分が1番まわりに支えてもらっていたように思います。新歓の仕事を通して人のつながりも強まったと思います。この場をお借りして沢山の人々の温かい心遣いに、厚く御礼申し上げます。本当に有難うございました。

私の眼に映った日本

生理学第一講座 シャハ シャマル クマル

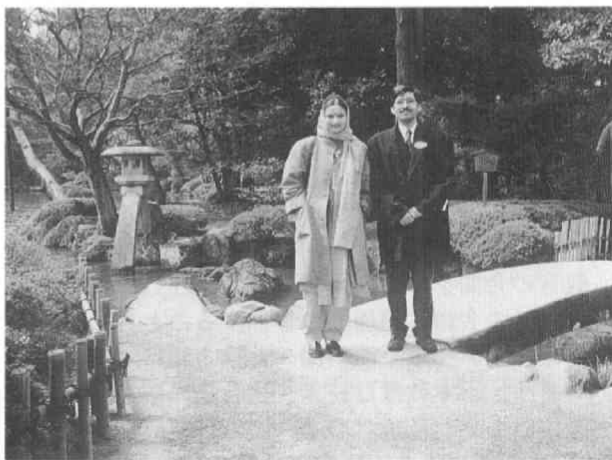
はじめに、私は「かぐらおか」に書く機会を与えて下さった方々に感謝申し上げます。自己紹介から始めたいと思います。私はシャハ シャマル クマルと申します。シャハは姓です。私はバングラデシュのダッカ医科大学を卒業しました。大学に入学する前は、りっぱな医者になりたいという夢を持っていましたが、勉強するうちに徐々に気持ちが変わり、いつしか研究者になりたいという希望を持つようになりました。私は特に体温調節に興味を持ち、研究したいと思いました。しかし、この夢をどのように実現させたらよいのかは、その時はわかりませんでした。卒業後、体温調節のより専門的な知識を得るための機会を色々と探しました。その中で、黒島辰汎教授の研究室のことを知りました。私にとって、自分のお金で外国へ行き勉強することは経済的に困難でしたが、黒島教授のご好意で日本の文部省奨学金制度を受けることができました。旭川に来てはや3年になりました。

来日してこれまで、カルチャーショックを受けたという経験はありません。その理由は多分私が多文化の環境の中で育ったため、また私と日本人の間には共通のものがたくさんあるためだと思います。私は大多数の人々がイスラム教を信仰する中であって、ヒンズー教徒の家族の下に生まれました。私の国ではほとんどの人々が宗教を信じ、主にヒンズー教とイスラム教のどちらかを信仰しています。同じバングラデシュ人ですから共通性もたくさんあり、平和に暮らしていますが、宗教に由来する文化や習慣はこの二つの宗教ではかなり違います。私はヒンズー教徒ですが、信仰は強くありません。しかし、私は

人々の生活に根付いている、様々な宗教上の習慣や、伝統的文化を尊敬しています。このような宗教のとりえかたは現在の多くの日本人にも共通しているように感じられます。私はこの3年間で日本の色々な習慣や文化を経験し、そして自分の生まれ育った文化と日本文化に多くの共通点を見出すことができました。神社やお寺を見に行ったり、盆踊やお茶会、さらに結婚式やお葬式などを体験したときは、まるで自分の故郷にいるように感じたほどです。

精神的なこの共通点を見いだすことができた他に、私はここでよい友人や素晴らしい先生方、多くの親切な方々と知り合い、また旭川の美しい自然や日本の美味しい食べ物を楽しむ機会を得ることができました。これら総てのことが、大学院での勉強のための素晴らしい雰囲気を作ってくれています。

わたくしは自分の夢を実現させるために、これからもがんばって勉強して行きたいと思っています。



金沢の兼六園でとった写真です。

外国人留学生一覧

平成8年4月1日現在の本学在籍の外国人留学生は、大学院学生11名、学部学生3名、研究生3名の合計17名です。

17名の方々は一覧のとおりですが、挨拶を交わすなど簡単なことから交流を深めてゆきたいものです。

(学生課)

氏名	通称	性別	国籍	種別	期間	所属
Delamou Alexandre Dicko デラム アレクサンドル デイコ	デラム	男	ギニア	大学院学生	1993. 4. 1~ 1997. 3. 31	外科学第二講座
Md. Mozammel Hoq モハマド モザマル ホック	ホック	男	バングラ デシュ	大学院学生	1993. 4. 1~ 1997. 3. 31	細菌学講座
Duenas Julio Cesar デュエニアス フリオ セッサー	フリオ	男	ペルー	大学院学生	1994. 4. 1~ 1998. 3. 31	産婦人科学講座
Saha Shyamal Kumar シャハ シャマル クマル	シャハ	男	バングラ デシュ	大学院学生	1994. 4. 1~ 1998. 3. 31	生理学第一講座
Santos Severino Barbosa Dos サントス セベリーノ バルボーザ ドス	サントス	男	ブラジル	大学院学生	1994. 4. 1~ 1998. 3. 31	内科学第三講座
Ainory Peter Gesase アイノリー ピーター ゲサセ	ゲサセ	男	タンザニア	大学院学生	1995. 4. 1~ 1999. 3. 31	解剖学第一講座
陳 敏 チェン ミン	チェン	女	中国	大学院学生	1995. 4. 1~ 1999. 3. 31	薬理学講座
于 立志 ウー リッシ	ウー	男	中国	大学院学生	1995. 4. 1~ 1999. 3. 31	産婦人科学講座
金 股 鉄 ジン インテエ	キン	男	中国	大学院学生	1996. 4. 1~ 2000. 3. 31	内科学第一講座
馬 紅 マ ホン	マ	女	中国	研究生	1996. 1.23~ 1997. 3. 31	薬理学講座
Sharifa, Dinara シャリファ デイナラ	ダイナラ	女	バングラ デシュ	研究生	1996. 1.20~ 1997. 3. 31	産婦人科学講座
白 躍 宏 バイ ヤオホン	バイ	男	中国	大学院学生	1995. 4. 1~ 1999. 3. 31	整形外科講座
郝 双 林 ハオ シャリン	ハオ	男	中国	大学院学生	1996. 4. 1~ 2000. 3. 31	麻酔・蘇生学講座
張 冀 煒 チャン ジーウエイ	チャン	女	中国	研究生	1995. 8. 1~ 1996. 3. 31	小児科学講座
Khor Lee Wee コー リー ウィ	コー	男	マレーシア	学部学生	1991. 4. 1~ 1997. 3. 31	第6学年学生
Azurawati Md Alwi アズラワティ モハマッド アルウィ	アズラワ ティ	女	マレーシア	学部学生	1994. 4. 1~ 2001. 3. 31	第2学年学生
Syamsul Muhammed シャムスル ムハマッド	シャム スル	男	マレーシア	学部学生	1994. 4. 1~ 2001. 3. 31	第2学年学生

研究室紹介

■ 物理学 ■ 本間 龍也

物理学教室は、開学時に学科目の一教室として設立されました。スタッフは谷本光穂教授、本間講師、安濃英治教務職員と源長由美子事務官の4人です。物理学の教育（講義と実験）はもとより、情報処理教育にも発足以来中心的な役割を担ってきています。3年前に開講された自然科学特別実験（物理学）では、物理学の中でも比較的新しい分野の知識と興味を持って（？）修得してもらおうと奮闘しています。教育面ではこれで結構忙しいのですが、この春からは看護学科の学生に対する物理教育（講義と実験）にも携わることになり一同、火の車であります。

教育の合間をぬい、研究にも力を注いでいます。国内・外の会議に積極的に参加するとともに、必要な情報・装置を求め西へ南へと精力的に足を伸ばしています。谷本教授は長年、化合物の磁性を研究してきました。最近では機器センターに導入されたESRを武器に更なる研究の発展を目指しています。本間は高温超伝導体の研究に従事しています。現在

は高圧下での電氣的性質に注目し、作成した試料を携え、“吉幾三”を彷彿とさせる姿で東京へと出稼ぎに行きます。安濃教務職員は遷移金属に関する研究を電子顕微鏡と光吸収測定を駆使し進めています。終日、機器センターにこもる日も少なくありません。

スタッフが少ない故か、教室独自の行事等は特になく、個々人が、スポーツに、酒に、植木（？）に・・・に精をだすといった具合です。その点ではスタッフの多い講座がうらやましく思えます。

今春からこれまで以上に教育そして研究に忙しい毎日が訪れるでしょうが、少人数ながらも更なる発展を目指し頑張る所存です。

(物理学講座 講師)



平成7年度学位記受領者名簿

氏名	課程・論文の別	学位記授与年月日	氏名	課程・論文の別	学位記授与年月日
西野共子	論文博士	平成7年6月30日	千葉薫	論文博士	平成8年3月25日
前田富興	論文博士	平成7年6月30日	長嶋知明	論文博士	平成8年3月25日
田村俊哉	論文博士	平成7年6月30日	佐々木雅弘	論文博士	平成8年3月25日
高田稔	論文博士	平成7年6月30日	藤井敬三	論文博士	平成8年3月25日
近江谷秀昭	論文博士	平成7年6月30日	富田一郎	課程博士	平成7年6月30日
大崎純三	論文博士	平成7年9月29日	坂爪悟	課程博士	平成7年6月30日
大木康生	論文博士	平成7年9月29日	片山英人	課程博士	平成8年3月25日
齊藤永仁	論文博士	平成7年9月29日	牧野雄一	課程博士	平成8年3月25日
長根忠人	論文博士	平成7年9月29日	齊藤美恵子	課程博士	平成8年3月25日
木村隆	論文博士	平成7年9月29日	安孫子亜津子	課程博士	平成8年3月25日
井門明	論文博士	平成7年9月29日	眞岸克明	課程博士	平成8年3月25日
引地泰一	論文博士	平成7年12月25日	片田彰博	課程博士	平成8年3月25日
山下泉	論文博士	平成7年12月25日	上口権二郎	課程博士	平成8年3月25日
斎藤義徳	論文博士	平成7年12月25日	秋葉真理子	課程博士	平成8年3月25日
石川雅彦	論文博士	平成7年12月25日	水本桂子	課程博士	平成8年3月25日
中村泰浩	論文博士	平成8年3月25日	談勇	課程博士	平成8年3月25日
早勢伸正	論文博士	平成8年3月25日	姜波健	課程博士	平成8年3月25日
工藤浩市	論文博士	平成8年3月25日			

平成8年度大学院入学者名簿

氏名	専攻	研究指導教官	氏名	専攻	研究指導教官
和田恵子	細胞・器官系	石川睦男	長峯正泰	生体情報調節系	海野徳二
佐藤祐一	細胞・器官系	石川睦男	中尾幸晴	生体情報調節系	小川秀道
蓮池史画	細胞・器官系	石川睦男	片山隆行	生体情報調節系	菊池健次郎
高橋学位	生体情報調節系	飯塚一	長岡泰司	生体情報調節系	吉田晃敏
芝木泰一郎	細胞・器官系	久保良彦	竹田眞純	生体情報調節系	吉田晃敏
伊澤功	細胞・器官系	高後裕	金殷鉄	生体情報調節系	菊池健次郎
吉川賢忠	生体情報調節系	牧野勲	郝双林	生体情報調節系	小川秀道
上林哲子	生体情報調節系	牧野勲			

ク ラ ブ 今 昔

**硬式庭球部とは？その概念、疫学、
症状、検査所見、診断、治療法、予後
について原稿用紙3枚半にまとめよ。**

第5学年 山本美知郎

概念～米増脳神経外科教授の下、現在男子21名女子16名でシーズン中は週6日本学コートで硬式テニスをしている団体である。

疫学～現役部員37名、OB103名、計140名の大所帯であり、ウィンドウピリオドにある新一年生や、OB会費未納の為名簿から削除されてしまった方々を含めると、本学で最も巨大な団体の1つと言える。そして、その発生頻度は1学年100人で計算すると、5.8人となる。

症状～皮膚黒色、一日中ジャージ（夏は短パン）授業中倦怠感（朝練の日）、無意識の素振り、などが挙げられるが、個人差も大きい。

検査所見～メインイベントである北海道学生テニスリーグ（王座と言う）で現在男子部女子部共に6部中2部であり、1部復帰を目指して日夜練習に励

んでいる。また、東医体でも昨年度女子部が準優勝している。

診断～症状から1目見てそれとわかるが、春先においてスキー部との鑑別を要する。なぜなら、ちょうどその頃雪焼けの彼らとテニス焼けの我々の黒さが一致するからである。しかし、ここは落ちていて下肢を視診すれば大丈夫。我々テニス部は足も黒く短パンの跡がついており、これにて確定診断となる。

治療法～抗紫外線療法、降雨療法、定期試験などがある。抗紫外線療法とは、一般に日焼け止めと言われ、近年化粧品メーカーから優秀な商品が発売されており、女子部の貴重なアイテムとなっている。降雨療法とは、その名の通り雨による練習中止のことで、我々の熱い想いもやはり御天道様には敵わぬ。定期試験とは、日頃勉強していない我々の特効薬でありかつ広く学生にとって最大の敵である。

予後～大雪山を望む大自然の中で日々テニスに勤む我々は肉体的にも精神的にも健全で、予後は極めて良好である。

羽球部今昔物語

第5学年 池田 大輔

旭川医大羽球部は、1期生、2期生が中心となって、楠裕一先生を主将とし、晴山雅寛先生を顧問として迎え、昭和49年に結成されました。

発足当初は、バドミントン経験者も少なく、もちろん、ノウハウも無かったため、練習内容もままならなかったそうです。その上、当時、大学には体育館も無く、パルプの体育館を貸していただいて、練習場所を何とか確保していた、そんな状態でのスタートだったと聞きます。

その後、山崎左雪先生、山本康弘先生をはじめとする、いわゆる「骨のある」先輩達が次々と入部され、羽球部は次第に形を成してきました。

このような先輩達の努力が実を結んだのは、昭和60年、佐藤元彦先生が主将のときのことでした。岩波悦勝先生、田熊直之先生を中心に、東医体で初のメダル（男子団体戦3位）に輝いたのです。

そして、ここ数年、羽球部は「黄金時代」を迎えています。昨年の東医体では、男女団体戦、個人戦ともにメダルを獲得し、これで男子は3年連続、女子は2年連続のメダルとなりました。この「黄金時代」を語るときに忘れてはならないのが、大羽文博先生です。とにかく、練習は厳しいものでした。おそらく、羽球部史上No.1でしょう。僕自身やめなくなったことも一度や二度ではありません。しかし、大羽先生の牽引力があったればこそ、今の羽球部があるのです。もちろん、それも、他の多くの先輩の土台があったからであるのは言うまでもありません。

ただ、羽球部の歴史を語るときに残念なことは、金メダル（東医体優勝）がまた無いことです。現在の顧問である山下裕久先生も、そうはっぱをかけて下さるのですが、毎年、あと一歩のところまで逃しています。

現在、部員は約30名。楽しい雰囲気の中、大いなる目標に向かって頑張っています。

ギター部今昔

第5学年 谷山 宜之

私達ギター部は発足から、今年で17年を数えます。顧問は歴史・比較文明論の原田先生にお願いしていましたが、先生が退官されたため現在は泌尿器科の宮田先生に顧問をお願いしています。

昔から多数の部員が在籍しており、秋の「音楽の夕べ」では、プラスバンドや室内楽に勝るとも劣らない活動を行っていた時期もありました。また当時はその他にも、学校祭での演奏や買い物公園の喫茶店の御好意による演奏等も行っていました。

以前は実際に活動している人も多く、市内のギター教室とのつながりもあったため、ある程度の人数での合奏も行なっていましたが、現在は名目上の部員は多数いるものの実際に活動している人数は減ってしまいました。

ジャンルは主にクラシックだったのですが、ここ何年かはポップスやジャズ等も演奏するようになり

ました。

3年前に卒業された永坂先生は技量も高く、早くから部長職や多数の演奏会でのソロもこなされていました。入学当時の私も色々と教えていただき、また、機械仕かけかと思う程の見事な指の動きに驚かされたものでした。

2年前に卒業された尾森先生は、元々ロックのエレキギターから始めた方でしたが、クラシックギターでもその技術は生かされており、クラシックからロックやジャズまで何でもひきこなされ、部室ではいつも様々な曲をひいて楽しんでおられました。

一見根暗で何やら昼にごそごそしているだけの部に思われがちでしょうが、輝やかな時代も実はあったわけです。

これからも各自が時間のある時に少し部室に立ち寄って、好きな曲を好きなだけ練習するという気楽さを保ちつつ、地道に活動を続けたいと思います。

ロック研究会

第4学年 本間 俊一

旭川医大 Rock 研究会は、昭和54年7月に設立されて以来、精力的に活動をし、数々の名バンドを輩出しています。Way (Vo: 林憲一先生、g: 高田達郎先生、b: 後藤学先生、d: 柏田元文先生) と Reversible (Vo: 太田智之先生、g: 佐藤健一先生、b: 近藤俊一先生、d: 小池且弥先生、Key: 木村仁美先生) による旭川市公会堂小ホールでの合同 Final Live は今でも伝説として語り継がれている。また、立花幸晃先生(d)、野村雅宏先生(g)、松本学也先生(b)、中村聡喜先生(Vo)、による、The Red Hats の活躍も忘れられない。また昨年は岡本聡先生率いるG☆Zの解散 Live も行なわれた。

現在は、衛藤雅昭先生を顧問として約35名、8バンドで活動を続けている。特に目立った活躍をしているのが、飯塚淳平(g)、加藤良久(Vo)、松尾卓見

(b)、塚田晴彦(Key)、後藤幹裕(d)、による、ホルモンである。'93年7月プラタナス通り祭大学対抗バンド合戦優勝、'94年2月(公開生放送)FM-NHK オープンスタジオ'94出演、'94年3月STV ラジオ“メモリアルライブ”'94出演、'95年3月STV ラジオ青春サウンド'94出演、'95年3月テレビ朝日えび温バトル北海道予選テーブル審査通過、'95年8月、さんろく祭バンドコンテスト出場(3位)と輝かしい実績を残している。今年もさらなる活躍が期待できる Rock 研を代表するバンドである。また、その他のバンドもホルモンに続けとばかり、積極的に活動を続けている。

また、今年、OB会設立元年でもあり、OBの先生方との交流を深めていこうという計画もある。

さらに、1、2年生のバンドもこれから活発な活動が期待できる。

大学祭実行委員会から

大学祭実行委員会委員長 第5学年 三関 哲矢
時が経つのは早いもので、また大学祭の季節がやってきました。私は入学して以来、大学祭に関わり続けてきました。過去四年間の大学祭の準備は、私にとって単なるイベントではなく、自己鍛錬や教育の場であったような気がしています。

ここ数年のことですが、毎年のように下の学年への引き継ぎがうまくいきません。これは私が入学した年から変わらないで存在し続ける問題です。昨年たまたま現在の六年生が中心となって、素晴らしい規模の学祭を作り上げることができました。だからといって今年の大学祭実行委員への引き継ぎがうまくいったかという点必ずしもそうとは言い切れません。

結局、大学祭とは誰が、誰のために、何の目的で行うものなのかということをお我々自身が無視あるいは軽視しがちです。毎年、年度初めに必ずささやかれる噂に「今年の学祭はないの?」というのがあります。

しかし、そうした噂はただささやかれているだけで、決して自らの手で大学祭を作り上げようとする気概の持ち主の発言ではありません。昨年を除く近年の大学祭が不振に喘いでいる原因は我々学生自身が本質的に持っている気概のなさや少なからずリンクするような気が致します。我々の世代はよく個人主義の世代だといわれますが、我が身を振り返り、また周りの学生諸君を見渡したとき、一層その思いを強めざるを得ません。

しかし、少なくとも私自身が大学祭の仕事を通して得た経験は何にも換え難いものであったし、皆さんにも少しでもいいから大学祭の仕事の面白さを体験してもらいたいと思っています。我々の力で素晴らしい大学祭を作り上げることができたならば、もう我が大学生活に悔いはありません。

最後に私をご支援して下さった諸先生方、並びに学生課を初めとする事務の皆様方、快く協力を申し出て下さった関係諸氏に深く感謝の意を表し、実行委員長の挨拶とさせていただきます。

東 医 体 成 績

去る3月17日(日)~23日(土)、長野県菅平高原にて第38回東医体スキー競技が行なわれました。

男子は、2連覇を目標に東医体に臨みましたが、惜しくも準優勝という結果でした。アルペン部門はほぼ予想通りの活躍でしたが、クロスカントリー部門は来季に向けて一層の努力が必要であるというのが、大会を終えての感想です。個人では、後藤孝(5年)が、彼自身最後となる東医体で回転競技2連覇を果たし、有終の美を飾りました。

女子は今回も圧勝し、連勝記録を6に伸ばしました。旭医女子にはとびぬけて強い選手はいませんが、高いレベルで駒が揃っていたのが勝因です。

個人の結果は以下の通り。(6位入賞分、カッコ内は学年)

男子XCリレー 2位 旭川医科大学Aチーム
第1走者 田中 和幸 (4)
第2走者 餌取 博 (4)
第3走者 水上 周二 (4)
第4走者 中川 宏士 (2)

スーパーG 4位 後藤 孝 (5)

大回転 2位 後藤 孝 (5)

回転 優勝 後藤 孝 (5)

女子XC 5km 3位 山本ゆき子 (5)
4位 皆川 裕子 (4)
XC 3km 4位 皆川 祐子 (4)
6位 山本ゆき子 (5)
XCリレー 優勝 旭川医科大学Aチーム
第1走者 北畑 歩 (1)
第2走者 皆川 祐子 (4)
第3走者 山本ゆき子 (5)

残念ながら入賞を逃がした者やシード権(男子30位、女子15位)を逃がした者も、練習の成果を充分に発揮しました。

現在は、来季優勝に向けて持久力向上を主眼におき、部員全員練習に励んでいます。



学 内 ニ ュ ー ス

平成 8 年度 入学式

医学科の入学式が、4月5日（金）10時から本学体育館において挙行されました。

式では新入生 100名を代表して青木美江さんが宣誓を行い、医学生としての自覚を新たに大学生活の一步を踏み出しました。

また、看護学科の入学式は、4月25日（木）10時から本学体育館において挙行されました。

看護学科一期生の新入生60名は、緊張の中にも看護学科の歴史を作るべく、決意を新たにしていたようです。（学生課）



医学科入学式



看護学科入学式

新入生研修実施される(医学科)

平成8年度新入生研修が4月15日(月)・16日(火)の両日開催されました。

第1日目はA組、第2日目はB組を対象に実施されました。研修は新入生を12~13名のグループに分け、1グループに3名の若手教官が指導にあたり、自己紹介について学生生活全般にわたり助言並びに懇談が行われました。（学生課）

平成7年度学士学位記授与式

平成7年度学士学位記授与式が、3月25日（月）10時30分から本学体育館で挙行されました。

式では、室内合奏団が奏でる調べのなか、学長より卒業生99名一人ひとりに学士学位記が手渡されました。

ついで学長から卒業にあたり式辞が述べられました。（学生課）

平成8年度運営組織

本学には、医学教育についての調査研究、教育課程の編成、修学指導、授業及び試験の実施、単位の修得及び履修、学籍関係等について審議する機関として教務委員会があります。

また、学生の厚生補導に関する調査研究、学生の課外活動、福利厚生等について審議する機関として厚生補導委員会があります。

両委員会の平成8年度の委員は次のとおりです。（平成8年4月1日現在）

〈教務委員会〉

委員長	安孫子 保（副学長）
副委員長	片桐 一（図書館長）
委員	岡田 雅勝（第1学年学年担当）
	谷本 光穂（第2学年学年担当）
	坂本 尚志（第3学年学年担当）
	藤澤 仁（第4学年学年担当）
	菊池健次郎（第5学年学年担当）
	奥野 晃正（第6学年学年担当）
	中村 正雄 松島 少二
	油野 民雄

〈厚生補導委員会〉

委員長	安孫子 保（副学長）
副委員長	上口勇次郎
委員	岩渕 次郎 田中 剛
	塩野 寛 福山 裕三
	亀下 勇 八竹 直
	米増 祐吉 廣川 博之
	酒木 保

（学生課）

平成8年度の主な行事

今年度の主な行事は次のとおりです。

4月5日	医学科入学式
4月25日	看護学科入学式
4月15日～16日	医学科新入生研修
5月23日	看護学科新入生研修
5月31日～6月2日	医大祭
9月4日	体育大会
9月25日	解剖体慰霊式
11月5日	本学記念日
3月25日	学士学位記授与式 (学生課)

教官の異動

定年退職	96.3.31	解剖学第一教授	小野 一幸
〃	96.3.31	外科学第二	〃 水戸 勉郎
〃	96.3.31	整形外科学	〃 竹光 義治
辞職	96.3.31	第三内科講師	岡村毅典志
昇任	96.4.1	病理学第一助教授	李 康弘
〃	96.4.1	看護学科	〃 岩田 銀子
〃	96.4.1	第一外科講師	平田 哲
〃	96.4.1	第三内科	〃 小原 剛
採用	96.4.1	看護学科教授	岡田 洋子
〃	96.4.1	看護学科助教授	阿部 典子
〃	96.4.1	看護学科講師	安川 緑



窓外

千石 一雄

雑感

最近、英国での狂牛病が大きな話題となっている。狂牛病の原因はプリオンと呼ばれる病原体だと聞く。これを聞いて、マイケルクライトンのロストワールドが思い出された。ジュラシックパークで創造された肉食恐竜は、プリオンに汚染された羊の肉より抽出した蛋白エキスを餌として与えられたために、食物連鎖的に病気が蔓延し、生態系の崩壊につながったとする物語である。この話の中で、ヒトは一種の破壊的病原体であり、世界中の生物を滅ぼし生物進化を次の世代に押し進める原因になると批評している。

生物の進化は小集団のみで可能であり、集団が大きくなればなるほど革新的な創造は極めて困難となる。現実にマスメディアの発達には世界の集団化、均質化を促進し、多様性とりわけ知的多様性が消滅し、ヒトは種として終焉へと導かれる可能性が示されている。どこか最近のマスメディアに対する非難と符合するように感じられる。コンピューターによるインターネットによりもたらされる情報の氾濫により、

あらゆる人間が同一の考えを持つように強いられ、その結果として多様性が消失し文化的停滞がもたらされる可能性も否定できない。時々刻々進歩している医療技術、研究テクノロジーの分野においては、最新の情報を取得することは極めて重要である。

情報を制するものが勝利するとも言われる。しかし、情報にとらわれすぎることにより、ヒトの知的多様性が失われ、同じものの見方、考え方が横行する危険性がある。医学も本質は、真実の探求にあり、疾病の病因、病態を解明し治療法、予防法を見いだすことが最終目標であろう。しかし、真実を見極めることは容易ではなく、一昔前に普遍的に正しいと信じられていたことが、今では非科学的であると結論されている場合も多い。特に、医学の領域では数年前の定説が覆されることもしばしばである。したがって、10年先の未来でさへ、現在のテクノロジーが極めて滑稽に映ることが容易に推測される。しかし、その時点で信じられていることも、おそらく真実からかけ離れたその時点の仮説にすぎないのではないだろうか。すべてのヒトが同一の情報に暴露されることは、ときに真実から離れた方向に進むことを強いる可能性もある。ある先生に言われた『私は真実を知りたい。君も真実を知りたいだろう』という言葉が思い出される。

コンピューター時代に取り残された者のたわごと聞き流していただきたい。

(産婦人科学講座 助教授)